

東京講演会を開催

平城遷都1300年を記念して、2010年から始めた東京講演会も今年で5回目となりました。奈良文化財研究所は、考古学や文献史学、建築史、造園学、年輪年代学、環境考古学、保存修復科学、文化的景観等、多彩な分野の研究者が文化財の宝庫である奈良の地で、実物に即した文化財の総合的・学際的研究に取り組んでいます。この東京講演会は、そうした奈文研の日頃の活動や調査・研究の成果を広く紹介するための企画で、毎回切り口を変えて、文化財研究の魅力や面白さ、課題等をお伝えしています。

今回の東京講演会は、9月22日、有楽町朝日ホールにおいて「〈歴史の証人〉木簡を究める」と題して開催しました。

1961年に平城宮跡で最初の木簡が発見されてから半世紀が経過し、現在、全国から出土した木簡の総数は38万点を越えるほどになり、特に資料の絶対数が少ない日本古代史の研究にとって、今や木簡はなくてはならないものとなっています。

そこで、歴史資料としての木簡そのものに焦点をあて、6人の奈文研の研究者が『木簡を掘る』、『木簡を探る』、『木簡を読む』、『木簡を広げる』、『木簡と文字』、『木簡を伝える』として、その発掘から整理・研究の実状、木簡の保存方法等、奈文研が半世紀にわたって培ってきた木簡研究のノウハウを多角的に紹介しました。その後、『木簡研究の過去・現在・未来』として、講演者に外部の2人の専門家を加え、パネルディスカッションをおこない、会場からも多くの質問があり、大変盛況のうちに終了しました。

当日は、400人を越える方が来場され、演者の話を時にメモを取りながら、熱心に聴き入っていました。

(研究支援推進部 田中 康成)



講演会風景(東京会場)